

# 聞き取り調査

## 教育召集からシベリアへ

北海道 五十嵐 甚 吉

昭和十八年三月、補充兵教育三カ月の召集令状をもらい、盛岡市の部隊に入隊。

連隊砲中隊の速射砲分隊で、翌日から毎日基本訓練が始まった。

一期の検閲が終わった翌日アツ島玉砕の報道が入り、家に帰ることなく、引き続き秋田部隊に転属の命を受け、夜行列車で秋田駅に到着するも、隊内に伝染病が発生していたために、一週間程旅館に宿泊。軍用品の輸送作業をしていたが、全治する見込みなく、再

度札幌寒連隊に転属の命令が出た。

一期の検閲で速射砲を習ったのに、こんどは連隊砲分隊に配属。一週間のうちに樺太国境警備の命令を受け、夜間になると各中隊ごと移動開始。私は馬輸送班として苗穂駅から貨物列車にて馬と行動を共にして、<sup>マユウカ</sup>上敷香の練兵場にテントを張り、気屯地区に三角兵舎建築中で完成まで馬の訓練に励んだ。

九月に兵舎完成、要三三三部隊として行動開始、連隊砲の訓練を受けた。翌年、初年兵が入隊、教育助手として働き、上等兵、兵長と進級、八方山の陣地構築の命を受けて初年兵と山に登り作業に従事するも、二十年八月十日付で下士官教育隊に入隊のため下山。気屯の教育隊に到着するも、ソ連からの発砲で半田沢国境を突破せりとの連絡にて、至急中隊に戻るよう命

令を受け、分隊の四番砲手として任務に就いた。

翌朝機関銃中隊より側面射撃の依頼あり、陣地より分解して八方山高台に砲をかまえ、敵の進入を待った。やがて敵戦車が昨夜の戦鬨で気を良くして機関銃陣地を目標に進入して、中腹まで登ったところで攻撃開始の命令が出た。速射砲中隊で直接射撃の訓練を受けていたので、そのかいあり、二台の戦車を破壊、砲塔から逃げ出る兵士は歩兵の発砲で戦死した。

その後、進入して来ることなく夜を迎え、翌朝の攻撃準備のため、休養をとり待機するも、連隊本部からの連絡で、八月十九日午前零時戦闘中止、午前六時自ら武装を解いて軍道に整列の命令が出た。

ソ連軍との話し合いに、歩兵第三大隊の小笠原少佐他五人が馬に乗り、白旗を持って敵陣地に進入して行く姿を見た。

やがて中隊ごとに、兵器、弾薬を陣地に置き、ソ連の兵隊の管理行軍で、上敷香兵舎に集合、一週間程戦場整理の作業をするも、背のうを持って整列の命令が出、その場で中隊編成をして行軍が始まった。

豊原方面に南下することなく、北緯五〇度の国境に向かつて歩き始めた。途中日本軍の戦死者、ソ連軍の戦死者が道路沿いに倒れているも手を差し伸べるわけにかなかった。

毎日海岸を行軍、北樺太のアレクサンドロフスク港に到着、この地で一週間程貨物船の荷揚げ作業、そして空船になった船に乗船して航海が始まった。航路は南下しているので日本に帰れると思つて歩哨に聞くも、わからない。スターリンしか知らないとの返事。二、三日すると右側に島が見えるも、左側には何も見えなくなり、沿海州とわかり、ここで日本に帰る夢がなくなり、着いた港がウラジオストック。下船して町の中を歩くも、上部との連絡不十分で、また船に乗りナホトカに上陸。トラックに乗って二百キロ程北上、サムルカ收容所に到着。金網におおわれて、歩哨が立っている、バラック收容所での強制抑留生活が始まった。昭和二十年十月頃だったと思う。

医務室、炊事場、パン工場、守衛所と整備され、男ばかりの生活とは言えトイレが大小兼用の丸太造りで、

沢山の人が使用出来るが、人間としてこんないやな思  
いは二度と再びしたくないと思う。

入浴は、週一回収容所の外での蒸し風呂。脱衣所に  
歩哨がいて、所持品検査をして自分でほしい物があれ  
ば没収をする。くやしい思いをした。やがて毎日、朝  
夕の点呼で外に整列すると、本人はもとより全員の襟  
首にシラミが列をなして付いており、毎夜ペーチカの  
火にあぶって退治したが、追いつかなかつた。山での  
伐採作業とトラックによる木材の運搬と、往復監視の  
もと作業ノルマを与えられるも、毎日目標を達成して  
いた。食料は少ないながらも、がまんして、野外の作  
業休息の時に、芋掘りの終わった畑に小さな芋を拾い  
集め、焼いて食べては空腹を満たしていた。

ある日、食料受領のため、ソ連兵と馬車に乗って町  
へ出かけた。町の中心地で、前方からトラックが速度  
を出して走り通り過ぎると、その音に馬が驚き、くる  
くと道路を廻り始め、その反動で馬車から落下して  
右側胸を打った。三カ月ぐらい痛みもなく働いていた  
が、毎日四〇度ぐらいの高熱が続き、医務室で休養し

たが、原因がわからず、薬もなく医者もいない。いよ  
いよこれでは死を待っているようだった。

ソ連の収容所長が日本の兵隊に高いノルマを与えて  
いるため、病人やケガ人が出るので、中央からロシア  
の軍医と日本軍医が検査に入り、全兵隊の栄養と健康  
診断を行った。その時斉藤軍医の診察を受け、内科の  
先生であったので原因がわかった。三カ月前の胸部打  
撲により水がたまり発熱、早速注射針で水を取り出し  
た。幸い化膿しておらず、一日一日と熱が下がってき  
たが、長期療養が必要とのことで、また百六十キロ程  
南下、セミヨーノフカ陸軍病院に転送された。

三カ月前の入院で全治して、収容所に戻るよう診断  
され、トラックが来るまで待っていると、ソ連の担当  
軍医から、病院に残って患者の世話をしよう命令が  
出て、病院の第五病棟長として働くようになった。

担当病棟は結核と伝染病の患者で、病棟は天幕の内  
側に板材を使用しておがくずを中に入れ、冬もストー  
ブだけで十分の二段ベッド式で、病棟は五〇人収容の  
一棟から五棟まであり、ソ連の軍医と日本の軍医が各

病棟に二人、看護婦三人、准看護婦一人という編成だった。

別棟に手術室、レントゲン室、薬局、炊事室と整備され、軍医、看護婦の宿泊施設等完備していた。四キロから二百キロ程離れている約十五カ所の各収容所から、栄養失調から外傷患者まで毎日のようにトラックで転送されて来た。各収容所には医務室があっても応急手当でのみのため、重患になってから、また、トラック等の都合で転送が遅れるため、入浴して被服を取り替え、病棟が決まり、タンカで運搬途中死亡する人もいた。

病院勤務で一番つらいのは死体解剖の立ち会いだ。ソ、日の軍医が今まで治療してきた経過に誤りなかったか、治療カルテと照合確認する作業だ。

はじめのうちは最後の縫合まで軍医が行っていたが、冬の季節は安置室が寒いので、解剖処置後の縫合を自分が行ったことと、墓地に死体を運び、零下三五度の季節に友と穴を掘り埋葬したことは一生忘れられない。埋葬すると、ソ連の将校が死体頭部側に番号を記入

した墓標を立て、死亡埋葬済番号をカルテに記入整理していた。

特に伝染病棟の担当のため死亡者が多く、立ち会い、埋葬業務が抑留生活の中では一番つらいことだった。

病院のため、中央から軍医少佐級のキャピタン、マヨールが必ず査察して、病院の治療、薬品等、その時代としては良い方で、週一回は敷布、着替えは実施されていた。

昭和二十三年七月、患者帰国命令が出て、セミヨールノフカ病院にも第一便帰国のため、トラック二台が到着、重病人を除く患者の名前が呼び上げられ、約二台で百人ぐらいだったと思うが、完了、乗車して出発することになるも、輸送責任者として同行するよう命を受け、ナホトカ港に到着。

ここで輸送責任者の任を解かれ、一般患者として、すでに港に停泊中の第十一大拓丸の病院船に乗船、一路舞鶴港へと向かった。

途中両側の山並木を通り港に着いた時は、こんどは本当に日本に帰ったのだと、頬をつねってみた。

患者だけの帰国なので、船内生活、舞鶴上陸、宿泊手続中も平穩であった。

昭和二十三年七月二十三日は上陸記念日として忘れられない。米軍の取り調べが三十分程あり、翌朝北海道留萌市に向け列車に乗るも、満員で何日かかかって着いたかわからない程だった。途中、父親に迎えに来るよう電報を打つも、市役所の係員だけだった。事情を聞くと、父親は昭和二十一年二月十八日に死亡と説明された。弟も海軍でソロモン諸島の戦いで戦死。三人家族で泊まる家がなく、係員も復員のため住宅を世話するわけにいかず、戦前勤務していた会社の上司か友達の人に一時世話になるように言われ、冷たい返事、冷たい役人と腹を立てた。

よし今に見てる、軍隊生活と抑留生活の経験で、必ずゼロから出発して立ち上がって見せると覚悟を決め、友人のところへ世話になりながら復職、二年後結婚。妻と二人で一生懸命に働き、無事定年を迎えることが出来た。

妻は平成三年に死亡するも、息子と孫と同居、老人

クラブの役員として、皆さんと共にふれあいをもって生活している。

## シベリア抑留体験記

千葉県 鈴木 博

私は大正二ヶ月生まれ、戦争末期に死線をくぐり抜け、戦後シベリアに強制抑留され、二度三度いや数度死線を乗り越えてきた。

私は昭和十七年徴集、昭和十八年四月十六日千葉県東葛飾郡柏東部第一〇二部隊第四航空教育隊に入隊、四カ月で一期検閲終了後、満州遼陽第二〇一飛行場大隊補給中隊軍機に同年九月上旬転属、南満州昭和製鋼所（満州製鉄所）に防空隊として任務に着き、鞍山第二航空司令部貨察隊旋隊に転属、昭和二十年六月十日新京南飛行場に転進。この時点において鞍山飛行場に同属の独立飛行場第八十一中隊と合流、二十年八月五日付にて湯揚子羽攻撃飛行隊に派遣され、八月十日湯